The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞『不完全』（上）
Author(s)	ラーケーシュ，モーハン；小川，彩花
Citation	印度民俗研究. 2023, 21, p. 35-85
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91742
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『不完全』（上）

モーハン・ラーケーシュ　著
小川 彩花 訳・註

本作品は、ヒンディー語作家モーハン・ラーケーシュ（मोहन राकेश）の戯曲作品のひとつである आधे-अधूरे の前半部分の日本語翻訳である。作者モーハン・ラーケーシュは、48 歳で没したにも関わらず、様々な作品を著している。彼は 1925 年 1 月 8 日にアムリトサルで生まれ、1972 年 12 月 3 日にデリーで没した。パンジャーブ大学で修士をおさめた後、ヒンディー語教師や脚本家、雑誌の編集者など様々な仕事をしたが、どの仕事も長く続けることはできなかった。彼は結婚生活において二度の失敗を経験している。1950 年に最初の結婚をしたが、1957 年に離婚、その後 1960 年に二度目の結婚をしたが、1962 年に再び離婚した。その後 1963 年からアニーター・アオラク（अनीता औलख）という女性と共に暮らし始め、彼女との間に二人の子供が生まれた。

彼は戯曲作品だけではなく、短編・長編小説や旅行記、児童小説なども著している。彼は 1950 年代から 1960 年代にかけて、ナイー・カハーニー運動に参加し、ヒンディー演劇運動において重要な役割を果たしたとされている。彼が生涯に著した戯曲は आषाढ़ का एक दिन, लहरों के राजहंस, आधे-अधूरे の三作品である。彼の著した戯曲は三作品全てが悲恋の物語であり、それぞれにその時代を象徴する問題を描写している。1959 年に आषाढ़ का एक दिन は、音楽と演劇の専門学校であるサンギート・ナータク・アカデミー（संगीत नाटक अकादमी）の最優秀戯曲賞を受賞した。

आधे-अधूरे は 1969 年にモーハン・ラーケーシュによって発表された戯曲作品である。従来の家族の価値観とは異なった役割を担うようになった中産階級の家族の苦悩が描かれている。本作品は、他の二つの戯曲作品のようにカーリダーサやブッダの義兄弟であるナンダといった歴史上の人物を登場人物とするのではなく、現代に生きる核家族を登場人物としている。

本作品の翻訳においては以下のテキストを使用し、誤植だと思われる部分に対し二つのテキストを比較し翻訳を行った。

मोहन राकेश, 1969, *आधे-अधूरे*, उद्योगशाला प्रेस, दिल्ली, pp. 11-67.

Mohan Rakesh, *Aadhe-Adhoore (Hindi Edition)*, Radhakrishna Prakashan, 2021.

*本翻訳では、高橋明大阪大学名誉教授と長崎広子大阪大学教授からヒンディー語の解釈と日本語の言い回しについてご教示いただいた。また、戯曲の書式について菊池正和大阪大学教授からご助言をいただいた。この場を借りて深くお礼を申し上げます。

登場人物

カースーワー（ｋｓｗ/黒いスーツの男）：男１、男２、男３、男４の役も担っている。年齢は５０歳前後。顔は端正で、ある種の皮肉っぽさが浮かんでいる。男１の衣装：シャツとズボン。人生における戦いに負けた苦痛が顔に浮かんでいる。男２の衣装：ズボンと詰襟のコート。自分自身に満足しているが、それでも不安にかられている。男３の衣装：ズボンとＴシャツ。手にはたばこの箱。ずっとたばこを吸っている。自己中心であることが立ち居振る舞いから分かる。男４の衣装：ズボンと、古くさい仕立てのコート。分別くさい顔つきで、ずるがしこさもにじんでいる。
女：年齢は４０歳になったところ。だが、顔には若さの輝きと愛らしさが残っている。ブラウスとサリーは上等ではないがセンスはよい。特別な機会用のサリーも持っている。
長女：年齢は２０歳を超えていない。夫との関係に疲れている。せっかちである。時々、年齢より大人びているように見える。サリーは母親よりも質素。全てに投げやりな態度である。
次女：年齢は１３歳に近い。考え、声、行動―全てにおいて反抗的である。フロックはぴったりだが、片方の靴下に穴があいている。
長男：年齢は２１歳そこそこ。ズボンの中に押し込まれた派手なブッシュシャツは着古されてすり減っている。顔からも笑い声からも、辛辣さが垣間見える。

中流階級の水準から外れて、一段下の階級になったある家庭。

ありとあらゆる用途に使われている部屋の中には、この家族のかつての経済状況を示す遺跡である壊れかけのソファーセット、ダイニングテーブル、棚、そしてドレッサーなどが、何とか自分たちの場所を確保している。そこには、本来の用途に従ってではなく、部屋の限られたスペースに応じて何もかもが置かれている。当座の便宜だけを考えて置かれているために、家具同士のつながりがちぐはぐになっている。それでも、その便宜もいろいろな不便との妥協の産物である、いやむしろ不便の中に便宜を探した結

果であるように思える。家具は色々な場所に置かれ、その中には三脚テーブルが一つ、スツールが二つ三つ、破れた本を載せた本棚が一つ、そして書き物机と椅子もある。クッション、カーテン、テーブルクロス、ベッドシーツがあるが、どれもくたびれて、ほころび、継ぎが当たっていて、ない方がまだしもましに見えるほどである。

三つの扉が三方向に向いているのが部屋の中に見える。ある扉は部屋の後ろの中庭につながっている。ひとつは部屋の奥に、そしてもうひとつは外の世界とつながっている。中庭から外へ行くこともできる。台所へも中庭を通って行くことになる。幕が上がって最初に、ダイニングテーブルに飲んだ後置きっぱなしにされた、欠けたティーセットが照らされて浮かび上がる。そして破れた本や、壊れた椅子などが一つずつ浮かび上がり、その数秒後、照明がソファーに当たる。そこに黒いスーツの男が座っている。照明が男の正面でそのまま静止する。しかし時々、あちらこちらに照明が当たる。それと同時に、舞台の隅にも光を当てている。

ｋｓｗ「（*独り言をつぶやき葉巻の灰を払い落としている。*）再び、また再び始まる…！」

必死に自分自身を奮い立たせるかのようにソファーから立ち上がる。

「私は知らない。君たちが、私が誰か分かっているのか、私が言うことに何を期待しているのかを知らない。君たちはおそらく、この芝居において私に何か決められた役割があると思っている。役者、演出家、マネージャーや他の何かだと思っているかもしれない。だが私は自分に関してはっきりと何も言うことができない。芝居に関して私が何も言うことができないように。なぜなら、芝居もそれ自体が不確定だからだ。不確定である理由は…いや、理由を話すことはバカらしい。理由は全ての物事に何かしら存在する。とは言え、与えられた理由が実際その通りである必要はない。自分についてさえ確信をもっていない私が、他の何かについて理由があるとかないとか、なぜ言えよう？」

葉巻を燻らせながら、少しの間、何か考えるかのように立っている。

「私は本当に誰なんだ？この問いに向き合うことを、私はここに来てやめてしまった。ここの舞台にいる私というのは舞台より外にはいない、そして外にいる私というのは…まあ、この舞台の外で私がどういう存在なのか、君たちは興味を持たないだろう。多分、私についてはこれだけ語れば十分だ。歩道を歩いていて、急に男が君にぶつかる、それが私だ。君はただじっと私をにらみつける—それ以外に私に何の関心も示さない。私がどこに住んでいて、どんな仕事をしていて、誰と会って、どんな状況で暮らしているか、そんなことに君は興味を持たない。なぜなら私も君に興味がないし、ぶつかった瞬間、君にとっての私、私にとっての君は同じだからだ。だから今、私が立っているまさにこの場所に、君も立っていたかもしれない。ぶつかり合った二人、すなわち君と私には、とても大きな共通点が見られる。その共通点とは、君とそいつの中に、そいつとあいつの中、あいつと私の中に見られる…何はともあれ、この数式のクイズはどうでもよい。要するに私という人間をバラしてみれば、どこか他人と重なるところがあるのだから、私は何らかの形で自分以外の全ての人と同じである。そういう理由で、芝居の中であろうと外であろうと私に何か決まった役割はないのだ。」

部屋の端から端へと歩き始める。

「私は言った、この芝居も私のように不確定だと。その理由も、私がこの芝居の中にいること、そして私の存在によって、特別な家庭が、そして彼らの特別な環境が、何もかもが確定したりしなかったりするからなんだ！家族が変わることで環境も変わる。私も同じように変わる。このようにすべてが決まっていくのだ。この家族の女の代わりに誰か別の女が別のやり方で私のせいで苦しんでいたかもしれない、それともその女が私の役を演じて、私が女の役を演じていたかもしれない。芝居はそれでも最後まで不確

定なまま存在する。そしてこの決定をすることはとても難しいことだ、この芝居の主人公は誰なのか、私なのか、女なのか、状況か、あるいは、この三者の中で沸き起こるいくつかの問いなのか。」

再び舞台の前方で観客に向かって立つ。葉巻を口にくわえたまま、少しの間、上の方を見ている。フーッと息を吐きながら葉巻を手に取り、その灰を落とす。

「しかし、この不確定な芝居の中で、私自身が一つの不確定な役割であると弁明している、という可能性もある。この芝居が確定した形に変わる可能性もある―何人かの役を取り除いたり、一つか二つの役を加えたり、役をいくつか変更したり。あるいは、いくつかの台詞を消し、幕を入れ替えることによって。君たちが全てを見た後や全てを見終わる前に、何かのアドバイスをすることができるだろう。この不確定な登場人物と君たちは、この芝居の間何度も会うことがあるだろう…。」

軽い会釈と共に、彼の姿が薄暗闇にゆっくりと消えていく。その後、照明が部屋の隅々を順番に照らした後、一つの光に収斂する。部屋には誰もいない。三脚テーブルに広げたままの通学鞄があり、ノートや本など、バッグの中身がはみ出しているのが見える。ソファーに雑誌が何冊か、ハサミが一つ、そして切り抜かれた写真や、切り抜き途中の写真がある。椅子の背にかけられたパージャーマー[1]が掛かっている。女が家の物や、会社の物、自分の物など色々な物を持って外から帰って来る。顔には一日中働いた疲れと、持ち帰る荷物が多いことでうんざりした様子がうかがえる。帰って来て、手前の椅子に荷物を下ろしながら、彼女は部屋全体をちらっと見る。

---

[1] 男子が下半身に着用するズボン上の服。腰は紐で結ぶ、前あきではない、上着のクルターと合わせて着用する。

女　「（*疲れのにじんだ声で*）あー。（*少し失望した様子で*）また家に誰もいない。（*奥の扉を見て*）キンニー！いるわけがない、どこから返事ができるっていうの。（*三脚テーブルに置かれた鞄を見て*）まあなんてこと！（*鞄の中の本を一冊持ち上げて*）また本を破いて！どういうつもりよ、毎日どこからお金が降って来ると思ってるの。（*ソファーの近くへ行って*）そしてアショーク様は一日中こんなことばっかりして！（*切り抜きを持って見る*）エリザベス・テイラー、オードリー・ヘップバーン、シャーリー・マクレーン！こんな写真と一緒に人生も切り刻んで過ごすのね！」

切り抜きをソファーに戻し、腰を下ろそうとして、椅子に掛けたパージャーマーが目に入る。

「（*その方向に行き*）お偉い人がご立派に仕事をして下さって。」

パージャーマーを死んだ動物のように持ち上げて見る。そして部屋の隅に投げようとして、再び乱暴につかんで、それを畳み始める。

「一日中家にいるんだから、せめて自分の服を畳んで片付けることくらいできるでしょうに。」

パージャーマーを棚にしまう前に、ダイニングテーブルに置きっぱなしのティーセットを見て、さらにいらいらする。パージャーマーを椅子の上に投げつけ、そしてカップなどをトレーにのせ始める。

「お茶を飲んだら食器を台所に置くくらいのこともできないのかしら。帰って来て片付けるのはいつだって私なのよ…」

トレーを手にして部屋の奥の扉の方に進むや否や、男１がそちらからやって来る。女は立ち止まり、真っ直ぐ彼の目を見ている。しかし男１は目をそらして横をすり抜け、少し前に進む。

男１　「帰ってたのか？今日は早いんだな。」

女　「（*トレーをテーブルの上に戻しながら*）会社から帰って来たら家に誰もいないなんてね。あなたどこに行ってたの？」

男 1　「いや別に。ちょっと外へね。買い物さ。」

女　「（*彼のパージャーマーを手に取って*）私にはまったく理解できないのよ、どうなってるの？この家は。毎日帰って来ると、物がたくさんあちこちに散らかっているじゃない。」

男 1　「（*手を差し出して*）よこせ、ほら。」

女　「（*パージャーマーをはたいて再び畳みながら*）いまごろ何よ、言われる前に片付けてちょうだい。」

怒って棚を開けると、パージャーマーを閉じ込めるように放り込む。男 1 は手持無沙汰のように周りに目をやると、椅子の背に手を置く。

「（*テーブルの近くに来てトレーを持って*）お茶は誰と誰が飲んだの？」

男 1　「（*まるで悪いことをしたかのように*）一人だよ。俺だけ。」

女　「一人で飲むのに、ティーセットを出さなくてもいいでしょう…。キンニーには牛乳を出してくれた？」

男 1　「今日はまだあの子を見てない。」

女　「（*トレーを持って歩きながら*）見るも何もあなた家にいなかったじゃないの。」

部屋の奥の扉を通って台所に向かう。男 1 は長いため息をつきながら椅子を揺らし始める。女はサリーの裾で手を拭きながら台所から戻って来る。

男 1　「ほんの少し外に出かけただけだ。」

女　「（*他の物を片付けるのに忙しく*）どれだけ外にいたかなんて知らないわ。あの人が今日も来るわ、もう少ししたらね。あなたは家にいるわよね？」

男 1　「（*手を止めて*）誰が来るんだ？シンガーニヤーか？」

女　「ここの近くの誰かのところに食事をしに来るの。ほんの少しうちにも寄ってくれるのよ。」

男 1 は再び同じようにため息をついて椅子を揺らし始める。

「あなたのその癖が嫌いなのよ。何度言ったら分かるの？」

男１は椅子から手を離す。

男１　「お前が呼んだんだろう。」

女　「呼んじゃいけないの？彼は私の上司なのよ。」

男１　「上司ってのはそういうものじゃないだろ。」

女　「あなたに何が分かるの？あの人の下で仕事しているのは私なのよ。」

男１は再び椅子を揺らそうとして、また手を離す。

男１　「何時に来るんだ？」

女　「分からないわ。近くを通った時ね。」

男１　「（*かすれた声で*）あっそ…」

女　「もう二回もうちに来てくださったから、みんなが私をうらやましがるの。今日で三回目よ。」

ハサミ、雑誌、切り抜きを整理して、書き物机の引き出しに入れる。本を鞄にしまって、鞄を隅に立てて置く。

男１　「じゃあ、みんな彼がここに来ることを知っているのか？」

女　「（*鋭い視線を彼に投げかけて*）なぜ？悪いことかしら？」

男１　「悪いことなんて言ったか？むしろ良いことだと思うぞ。」

女　「あなたの言いたいことは全部分かっているわ。」

男１　「じゃあ俺は何も言わずに黙っていた方が良いってことか、でも、もし俺が黙っていたとしたら…」

女　「あなたが黙ってるなんて。誰か他の人のことでしょう。」

自分の物を椅子の上から持ち上げて、片付け始める。

男１　「前にあの人が来た時、俺がお前に何か言ったか？」

女　「よくそんなことが言えるわね！あなたは二回とも家にいなかった。」

男１　「だから何だというんだ？誰にでも用はあるじゃないか。」

女　「（*忙しそうに*）今日も用があるんでしょう？」

男１　「（*後ろめたそうに*）今日も行かなきゃいけないけど。でも俺がここにいた方が良いなら…。」

女　「私のために家にいる必要はないわ。（*部屋の中に何かやることが残っていないかを見て*）もう一杯お茶を飲む？自分用にお茶をいれるけど。」

男 1　「いれるなら俺にもくれ。」

女は台所に向かう。

「おい。」

女は立ち止まって彼の方を見る。

「ストライキになると言っていたが、あれはどうなった？」

女　「ストライキになったら分かるわ。」

男 1　「だけど起きるのか？」

女　「ストライキになるのを待っているの？」

部屋から出ていく。男 1 は頭を振り、何か自分にできることがあるかと、あちこちを見る。そして、思い出したかのように新聞をポケットから出して開く。全ての見出しを読みながら、彼の表情は笑顔になったり、皮肉たっぷりになったり、緊張したり、だらけたりする。それと同時に、「素晴らしい！」「やったな」「ほら見ろ」「で、それで、それから…」などの言葉が口から出る。女が台所から戻って来る。

男 1　「（*新聞をよけて、女の方を見ながら*）最近じゃどこでもストライキだな…これを見ろよ。」

女　「（*それには答えず*）あなたは本当に出かけるの？どこかに行くと言っていなかった？」

男 1　「ジュネージャーのところに行こうかと思ってた。」

女　「へえー。ジュネージャーのところ。行ってらっしゃい。」

男 1　「今のところ彼に渡す金はないけど、少なくとも顔は見せておかなきゃ。」

女　「へえー。顔を見せにねぇ…。」

男 1　「彼は半年もよそに行ってたんだ。何か新しい商売について考えているかもしれない。その中に俺のための…。」

女　「あの人があなたのために何かしてくれるもんですか！前もえらいことしてくれたじゃないの。」

ぞうきんを持って来て、椅子などの埃をはたき始める。

「いつもこの家は埃だらけ！どこから来るのかしら！」

男１　「お前はすぐあの人の悪口を言う。彼の方からいつも俺を助けてくれるのに。」

女　「助けてくれなかったらよかったのよ、あの人が助けなければ、あれほどの被害も出なかった。」

男１　「（*怒ってソファーに座る*）じゃあ俺は行かない！何も自分のためだけに行こうっていうんじゃないんだ。今まで運に恵まれなかったからって…。」

女　「そこを退いて、ちょっと掃除させて。」

男１は立って、再び座ろうと待っている。

「あっちの椅子に座ってちょうだい、そっちは掃除が終わってるわ。」

男１は責めるような目で彼女を見て、その椅子に座る。

「（*ぶつぶつ言う*）最初の印刷所はあの通り。そして次はどうだった？ジュネージャーが出したお金と同じ額をあなたも出したのよ。工場も一緒、経理も一緒だったのに…そして運命はあの人の味方をして、あなたの味方をしなかった。」

男１　「（*怒って立ち上がり*）お前はまた同じ話を…。」

女　「立ってどうしようっていうの？ 」

男１　「なぜだ、俺は立ったらいけないのか？」

女　「（*少し間を置いて、皮肉交じりの声で*）立つことはできるわ、家の中でだけね。」

男１　「（*何とかして怒りを押し殺して*）俺の代わりに君が工場の出資をしていれば分かっただろうに…。」

女　「今だって分かってるわ。私が分かってないとでも？」

男１　「（*ぶつぶつと*）あの頃、工場のもうけなんてほとんどなかったんだ！投資した金はどんどん使ってしまった。それで…。」

女　「誰が使ったっていうのよ？私？」

男１　「そうじゃない！俺だよ！あの頃この家にどれだけ金を使ったか分かってるのか？一ヵ月４００ルピーの家だ。どこへ行くにもタクシーだった。分割払いで冷蔵庫も買った。子供たちの修道会の金もあるんだ…！」

女　「酒だって買ってたし、パーティー三昧だったわ。そんなものばかりにお金を使っていたじゃないの。」

男１　「喧嘩を売っているのか？」

女　「今喧嘩することもできるわ、それを口実に出かけるんでしょう。あの人が来たらどう思うかしら、なぜ毎回こいつの亭主は外で用事ができるのだろう？って。もしかしたら私がわざと追い出してると思うかもしれないわ。」

男１　「あいつが俺と約束して来ているわけではないのに、俺があいつのためにどうして家にいなきゃいけないんだ。」

女　「これからは毎回あなたに聞いてからあの人を誘うわ、あなたがそんなに忙しいのならね。あなたがいつ何の会議に行かなきゃいけないのか知らないから。」

男１　「（*少し声のトーンを落として、敗北したかのように*）もういいだろ…、君はいつも喧嘩腰だな。」

女　「今、ジュネージャーが帰って来ているのよね？それならまた三日間家にいないってことね。」

男１　「（*精一杯、反論する*）君はまたその話を蒸し返すのか？もし俺が三日間家を空けたとしても、それは何のためだと思ってるんだ？」

女　「理由を知っているのは、あなたか息子よね。あの子も数日家にいないんだから。」

男１　「君は俺にあの子を重ねているのか？」

女　「いいえ、あの子にあなたを重ねているのよ。あなたが自分の人生を台無しにしたようにあの子も…。」

男１　「じゃあお前の娘はどうなんだ？あの 娘（こ） は人生を台無しにすることを誰から教わったんだ？（*口を重くして*）俺は誰かと駆け落ちなんて考えたこともない。」

女　「（*じっと彼の目を見つめて*）何が言いたいの？」

男１　「別に…。台所へ行ってお茶を作ってくれ、お湯が沸いているだろう。」

ソファーに座って再び新聞を開く。しかしじっくり読むことはできない。

女　「分かってるわよ、お湯が沸いていることくらい。私が誰かを家に呼んだ時はいつも、あなたがこの話をするのは分かっているわ。」

男１　「（*新聞を少し読んでいるかのように*）ほうほう。」

女　「息子の就職の話を誰かにどうしてしないのかって何遍も言うくせに、私がそのために何かしようとすると…」

男１　「あー、シンガーニヤーなら必ず仕事をくれるだろうな。かわいそうに、だから彼はここに来るんだ。」

女　「あんなに立派な人なのに、感謝していないの？たった一度言っただけで…」

男１　「俺が感謝していないって？ここに誰か新しい男が来るたびに俺はいつも感謝している。最初がジャグモーハンで、そのあとマノージュが通い始めて…」

女　「（*彼をじっと見て*）何が言いたいの？言いたいことがあればさっさと言えば良いじゃないの。」

男１　「なぜ…ジャグモーハンの名前を口にした途端、お前はうろたえるんだ？」

女　「（*心底うんざりした様子で*）あなたはほんとに恩知らずね、あなたに言ってやりたいわ、今日という今日はわたし…」

話しながら台所側の扉を向いた時、外から長女の声が聞こえる。

長女　「ママ！」

女は止まって声のした方を見る。顔は少し元気がなくなっている。

女　「ビンニーが帰って来たわ。」

男１は新聞を畳み、うっとうしそうに立ち上がる。

男１　「またいつもみたいに帰って来たのか。」

女　「行って、何がいるのか聞いてちょうだい。」

長女の声が再び聞こえる。

長女　「ママ！細かいお金で５０パイサーちょうだい！」

男１は何か嫌な場面に直面するかのように玄関に向かう。

女　「あなたのポケットに５０パイサーあるでしょう？牛乳のおつりが残っているはずよ。」

男１　「俺の新聞に５パイサー使っただけだ。」

外に出ていく。女は少しの間そちらを見た後、奥の扉から台所へと行く。長女が外から入って来る。男１は彼女の後ろから来て、女が部屋にいないことで、自分があたかも間違った場所に一人取り残されたかのように部屋を見渡す。

男１　「（*自分の不安を隠すことができずに、長女に*）座りなさい。」

長女　「ママはどこ？」

男１　「あっちだ、台所だろう。」

長女　「（*呼びかけて*）ママ！」

女がお茶のカップを持って部屋の奥の扉からやって来る。

女　「元気？」

長女　「ええ、元気よ。」

男１は女に手で、娘が何も持っていないことを合図しようとする。

女　「お茶はいる？」

長女　「今はいらない、まず手と顔を洗うわ、風呂場に行って。全身がべたべたしてるのよ、まるで…」

女　「あなたのその目、どうしたの？」

長女　「どうなってるの？」

女　「あなた、分からないの？」

長女　「ママがそう思ってるだけよ。手と顔を洗って来るわ。」

部屋の奥の扉に向かう。男１は意味ありげな顔で女を見て、彼女の近くに行く。

男１　「俺はいつものように帰って来たと思ったけど。」

女はお茶のカップを男の前に置く。

女　「はい、お茶。」

男１　「（*お茶を取りながら*）今回は何も荷物を持っていない。」

女　「もしかしたら、少し寄っただけなのかもしれないわ。」

男１　「財布の中はたった１ルピーだった。オートリキシャに乗る金も持ってなかった。」

女　「どこから来たのかしらね！」

男１　「どうしていつも話をそらそうとするんだ？なぜ一度はっきりと聞かないんだ？」

女　「何を聞くの？」

男１　「それを俺が君に答えるのか？」

女はお茶を一口飲んで椅子に座る。

「（*一瞬、返事を待ってから*）俺はあの男が良い男だと一度だって思ったことはない。君がそういう雰囲気を作ったんだ。マノージュはああでこうで…、だから何だって言うんだ。君が奴を家に招いたりしなかったら、娘が奴と駆け落ちして、こんなことになることもなかったんじゃないのか？」

女　「（*困ったように*）じゃああなたが自分であの娘に聞きたいことを聞いたらどうなの？」

男１　「どうして俺が聞けるというんだ？」

女　「どうして聞けないの？」

男１　「俺が聞くわけにいかないのは…。」

女　「あなたのすることは全部、何かの理由で間違ってるのよ。知らないと思った？」

ごくごくとお茶を飲んでカップを空にする。

男１　「そうか、何でも分かっているわけだ。もしこの家のことはなにもかも俺のせいだというなら…」

女　「（*立ち上がって*）もしそうなら、今よりどんなひどいことになっていたのか、分かったもんじゃないわ。私の稼ぎで食いぶちは何とかなったわ。でも、それすらあったかどうか。あの娘だって行き遅れる歳まで家にいたかもしれない、でもまさかこんなことになるなんて…誰もこうなるとは思わなかったわ。」

男１　「（*部屋の奥の扉を指さして*）あの娘が来る。」

素早く自分のお茶を飲み干して女に渡す。長女が先ほどに比べて元気を取り戻してやって来る。

長女　「（*入ってきながら*）冷たい水で顔を洗って少しすっきりしたわ。最近はただ…（*両親が自分を見つめているのに気が付いて*）どうしたの、ママ？どうしてそんな風に私のことを見ているの？」

女　「私はカップを片付けて来るわ。」

部屋の奥の扉を通っていく。男１も目をそらして、忙しくする口実を探す。

長女　「パパ、どうしたの？」

男１　「何もないよ。」

長女　「（*勢いを失って*）何かあるはずよ。」

男１　「ただ、お前のお母さんが言っていたんだ…」

長女　「ママ、何て言っていたの？」

男１　「そうじゃなくて、俺がお母さんに言っていたのは…」

長女　「何て言っていたの？」

男１　「お前のことについてね。」

長女　「何て話してたの？」

女が戻って来る。

男１　「お母さんが戻って来たよ、お母さんが自分でお前に言うだろう。」

まるでその場から逃れるかのように少し離れた場所に行く。

長女　「（*女に向かって*）パパは私の何の話をしていたの、ママ？」

女　「どうしてお父さんに聞かないの？」

長女　「パパはママが答えるって言ったのに、ママはパパに聞けって言うの？」

女　「あなたのお父さんが知りたがってたのよ…」

男１　「（*途中で遮って*）もしお前が知りたいと思っていないなら、やめておけ。」

長女　「知りたいことって何なの？」

女　「ただ知りたいのはね、最近あなたがあそこから来るじゃない、その様子をお父さんはこう思ってるのよ。ひょっとして…」

男１　「君はそう思ってないっていうのか？」

長女　「（*まるで被告席に立つかのように*）何なのよ？」

女　「あなたが、心の中に隠していて私たちに話さない何かがあるんじゃないかと思ってるの。」

長女　「そう思われるような何かが私にあるの？」

女　「（*男１に*）ほら、この娘に言いなさいよ。さっき私に言ったことを。」

男１　「君が始めた話だろう。君が最後まで言えよ。」

女　「（*長女に向かって*）はっきり聞いていいかしら？」

長女　「いいわよ。」

女　「あなたはあそこにいて幸せなの？」

長女　「（*自分自身を取り繕って*）ええ、とても幸せよ。」

女　「本当に幸せなのね？」

長女　「私が嘘をついているって言うの？」

男１　「（*完全に他の方向に顔を向けて*）それは全く答えになってない。」

長女　「（*不機嫌になって*）もし私が幸せじゃなくて、すごく不幸だって言ったら満足したの？」

男１　「人が答える時は顔にも出るはずだ。」

長女　「私の顔に何が映ってるって言うの？結核になったとか？私はもだえ苦しんで死ぬとか？」

男１　「何も誰もが結核になるというわけでもあるまい。」

長女　「じゃあ他に何が起こるっていうの？目が見えなくなる？鼻や耳が曲がる？唇が腐って取れるとか？私の顔がそうなっているっていうわけ？」

男１　「（*ムッとして振り返って*）お前のお母さんが、お前に聞いたんだ。お母さんと話すべきだよ。だから俺はこのことに決して関わりたくない。」

ソファーに行って彼は新聞を開く。しかし、新聞をさかさまにしているのに気が付き、それをひっくり返す。

女　「（*長女に*）もうこの話はやめましょう。二度とこの質問はしないわ。」

長女の目が潤む。

長女　「聞くくらい構わないわ。どんな人間でも何とかして生活しているのよ。」

男１　「（*新聞のページをめくって*）やっと答えた！」

女　「（*男１に対して*）ちょっと黙っていられないの？」

男１　「俺が何か言ったか？俺はここに静かに座ってるだけだ。（*新聞を読む*）運河の堤防を築くために１２歳の少年を人身御供。（*新聞から顔を覗かせて*）君が何を言おうと、俺の口からは一言も出でこないからな。（*再び新聞に向かって*）ウダイプルのマッダー村の堤防の請負業者の蛮行！（*新聞から顔を覗かせて*）ひどいもんだ。」

女は手を長女の肩に置き、彼女を書き物机に連れて行く。

女　「ここに座って。」

長女が瞬きをしながら椅子に座る。

「本当のことを教えてちょうだい。何か不満はないの？」

長女　「何も不満はないわ。」

女　「本当？」
長女　「不満と言えば何でもそうだわ。」
女　「でも、何か特別なことがあるんじゃないの？」
長女　「特別なことは何もないわ…」
女　「そうなの？」
長女　「特別なことって言えば何でもそうだわ…」
女　「つまり？」
長女　「つまり…全てなのよ。」
女　「言い換えると…」
長女　「つまり、結婚する前はマノージュのことをよく知っていると思っていたわ。でも今になって…今…彼を知っていると思っていたのに、それは知ってるってことじゃなかったと思うの。」
女　「（*問題の核心に近づくかのように*）なるほど…じゃあ彼の素行に何かあるの？」
長女　「ううん。彼の行動には何もないわ。素行に問題はないの。」
女　「じゃあ、彼の性格に何か問題があるの？それのせいで…」
長女　「ううん、彼の性格は普通なの。それどころか普通の人よりもまともだと言うべきね。」
女　「（*さらに深く理由を突き詰めようと*）じゃあ何？」
長女　「それは私も分からないの。どこにどんな原因があるのか！」
女　「彼はきちんと稼いでいるの？」
長女　「ええ。」
女　「身体は？」
長女　「とても健康よ。」
男１　「（*そちらを見ずに*）全てが順調だとしたら…不満は何だ？」
女　「（*男１に対して*）邪魔をしないでくれる？（*長女に向かって*）あなたがこれら全部に対して何の不満もないなら、何か特別な事情があるに違いないわ、それか…」
長女　「それか？」

女　「それか…それか…今、私には言うことが出来ないわ。」

長女　「原因は…私たちの間に流れてる空気よ。」

男１　「（*彼女の方を見て*）何て言ったんだ？…空気？」

長女　「そう、空気。」

男１　「（*がっかりして頭を振り、顔を背ける*）なんてこった、空気だってさ！」

女　「（*長女の顔を真っ直ぐ見て*）あなたの言ってることの意味が、私分からないわ。」

長女　「（*立ち上がって*）多分私は説明することさえできないわ。（*不安そうに少し歩く*）他の人どころか、自分自身にも説明できないの。（*突然止まる*）ママ、こんなことってある…？」

女　「どんなこと？」

長女　「二人の人間が一緒に暮らしていて、同じ空気を吸えば吸うほどお互いのことがまるで知らない人のように感じるなんてこと。」

女　「あなたたち二人はそう感じてるの？」

長女　「少なくとも私はそう感じるの。」

女　「（*一瞬彼女を見つめて*）座って話さない？」

長女　「このままでいいわ。」

女　「あなたの言ったことが本当なら、その後ろに何か問題があるからじゃないかしら？」

長女　「問題って何なの？彼の手にこぼれたチャイ、会社から帰るのが３０分遅くなるとか。そんな小さなことが問題になるはずがないのに、でもなってしまうことがあるわ。私の心の中にわだかまりみたいなものが一つ詰まっていて、それを発散する何か口実が見つかるのを待ってるの。つまり…」

女は静かに続きを聞くのを待つ。

「最後には彼がぐったりしてしまうような限界点があって、そういう時には彼は同じことを言うの。」

女　「何て言うの？」

長女　「私がこの家から自分の心の中に、彼が決して彼らしくいられなくなるような何かをこの家から持ち込んだって。」

女　「（*誰かが彼女に平手打ちをくらわせたかのように*）何かって何？」

長女　「私も何か聞いたけど、彼の答えはいつも同じ。」

女　「何て答えるの？」

長女　「私自身の中か、それともこの家の中に答えがあるって。彼には分からないって。」

男１　「（*長女の方を向いて*）それ全部、彼が言ったのか？他には何て言ってたんだ？」

女　「この娘は今あなたと話してないの。」

男１　「でも俺の家の問題だろ。」

女　「あなたの家ですって！ハッ！」

男１　「じゃあこの家は俺の家じゃないのか？言ってみろ。」

女　「あなたは本当にこの家を自分の家だと思ってるの、なら…？」

男１　「言いたいことは何でも言ってくれよ。」

女　「１０年前に言いたいことを言うべきだったのよ…」

男１　「今言ってくれよ、１０年が１１年になる前に。」

女　「１１年にはなりえないわ。もし何もかも今のままなら全部がこうやって進んでいくのよ。」

男１　「（*じっと見つめて、それから視線をそらす*）本当にならないのか？ジャグモーハンはとても良い男だ！彼は再びデリーに転勤になったし、あの日、コノートプレースでも会った。いつか会いに来るって言ってた。」

長女　「（*冷静さを失って*）パパ！」

男１　「俺は何か悪いことを言ったか？あの男を称賛しただけさ。」

女　「たくさん褒めてちょうだい…あなたが褒めることができる他の誰でも。（*長女に*）マノージュは最近あなたにそう言ってるのね、彼自身も以前ここに来て、昼も夜もここにいて、どうして彼は分からなかったのかしら…」

長女　「それは彼に聞かなかったわ…」

女　「どうして聞かないの？」

長女　「なぜって私思ったの…でもどう言えば良いのか、何を思ったかって…彼が確信を持ってこう言っている、それが私には我慢できないの。周りにある何もかもをぶち壊したくなるの。なにかこうやれば…。」

女　「こうやるって何を？」

長女　「私が彼の心をひどく傷つけることができる何か。彼は私の長い髪が好きなの。だから考えたの、髪を切ってやろうって。彼は私が仕事するのに反対なの。だから何でも良いから仕事をしようって思うの。一度は彼が心の中で、もがき苦しむことをしてやりたい。でも何もできないし、できないとイライラして…」

女　「それでここに来るの？」

長女は一瞬黙って頭を振る。

長女　「違うわ。」

女　「じゃあどうして？」

長女　「何日でもいいからとにかく自分と彼とを切り離しておくためよ。でも、私たちがまたあの同じ洞穴にもぐり込むまで、また何もかも同じことが始まるの。私はここに来て…私がここに来たのはね…」

女　「ここはあなたの家なのよ。」

長女　「私の家！…そうだわ！私は、この家の何が、私には何か欠けていると思わせるのか、それを探してみたいの。（*崩れ落ちそうな声で*）ママ、それが何か分かる？それはどこにあるの？この家の窓とか扉？天井？壁？ママ？パパ？キンニー？アショーク？私がこの家から私と一緒に持ち出した不吉なものはどこに隠されているの？（*女の両腕を手に取って*）ママ、教えて。それは何？この家のどこにあるの？」

かなり長い沈黙。しばらくの間、長女の手は女の腕を掴んでいて、二人は見つめ合う。ゆっくりと男 1 が彼女たちの方を向く。すると女はゆっくりと長女の手を腕から

外す。女の目が男１と合うと、彼に何か言おうとするかのように彼に向かって歩み寄る。長女はまだ質問への答えを求めているかのように、その場に立ち尽くしたまま二人を見つめ続ける。男１は女が自分の方に向かって来るのを見て、彼女から目をそらし、しばらく困惑した後、無意識のうちに新聞を丸めて両手で縄を編むように新聞をねじる。近づきながら女は男１に話しかけるのをやめて、少しの間気を取り直す。その後、長女のところに戻り、軽く娘の肩に触れる。長女は一瞬目を閉じて感情の高まりを抑えようとする、そして女の手を肩から外し、椅子を掴んで座る。女は今何をすべきか分からず、しばらくの間、決めかねて手を絡ませる。女は再び男１と目が合うと、彼を軽蔑した目で見てソファーのスツールの向きを変えようと忙しそうにする。男１が立ち上がる。男１はねじり上げた新聞を手に持っているのをぎこちなく感じ、しばらく不安そうに立っていた後、そのねじった新聞を破り始める。すると、次女が玄関からやって来て、三人の様子を見て立ちすくむ。

次女　「何がどうなってるか全く分からないんだけど。」

三人のうち、女だけが彼女を見る。

女　「何を言っているの？」

次女　「教えてよ、何がどうなってるの？私が学校から帰って来た時、誰も家にいなかったわ。そして今帰って来たのよ、ママもいて、パパもいて、お姉ちゃんも…でもみんながこんなふうに黙ってて、まるで…」

女　「(*次女の方に進む*)あなたこそ帰ってからすぐにまたどこに行ってたの？」

次女　「どこでもいいでしょう。私が隣に座っていられるような人が誰か家にいたというの？私のミルク温まってる？」

女　「今出すわ。」

次女　「今じゃないの！！学校でおなかが空いてもお金がないし、家に帰ったら帰ったで、温かいミルクを何時間も待たなきゃならない。」

女　「言ったでしょう、今温めてるところだって。(*男 1 に向かって*) あなたがやってくれるの？それとも私が行きましょうか？」

男 1 は新聞の切れ端を両手でまとめて立つ。

男 1　「(*何か苦いものを飲み込むように*) 俺が行くよ…」

彼は新聞の切れ端を、まるでそれを自分がバラバラに引き裂いたとても大事な文書であるかのように見ている。

女　「(*次女に*) 今日また本を破ったの？ 」

男 1 は歩いていたが、この大事な事件の結末を見守るために立ち止まる。

次女　「それは勝手に破れたの、どうすればいいのよ。今日の裁縫の授業でも同じことが起きたのよ。先生は言った…」

女　「先生については後で話して。先に教えてちょうだい…」

次女　「ママは毎日言う、後でね、って。今日糸を買ってくれなかったら、明日から私学校に行かないから。先生はクラスの皆の前で私にこう言ったのよ…」

女　「先生の話はもうやめてって言ってるでしょう。しつこいわね！」

次女　「それなら学校をやめさせてよ。あのぐうたらが一日中ふらふらしているみたいに私もふらふらするわ。」

この間、長女はかなり不安そうに次女を見ている。

長女　「(*自分を抑えられずに*)丁寧に話せないの？ 彼はあなたの兄よ。」

次女　「なんでよ…あいつはふらふらしてないっていうの？」

長女　「キンニー！ 」

次女　「お姉ちゃんはここにいたのよね。お姉ちゃんはあいつについて何か言っていたの？お姉ちゃんにとっても兄でしょう。例え一歳だけ年上だとしても、それでも年上は年上よ。」

長女　「(*女に*) ママ、この子に言いたい放題言わせすぎよ。」

男 1　「もし俺が同じことを言ったら…」

女　「あなたが前から言いたいことは何でも言えば良いじゃない、そうしたらどうなることか、もし…」

男１　「（*部屋の奥の扉に向かって歩いて*）何を言うことがある？ 絶対言わないぞ。俺はこの子のミルクを温めて来る。」

出ていく。

次女　「明日は絶対に糸の詰め合わせの箱が必要なの。今日、バネルジー先生が女子学生全員に言ったのよ、今日の創立記念パーティーのために三つの新しいキット…」

女　「いくつですって？」

次女　「三つよ、三つ。女の子みんなが作るのよ。それに、ママはクリップと靴下が今週必ず来るって言ってたよね？破れた靴下を履いて学校に行くのはとても恥ずかしいのよ！」

すこしの間、奇妙な沈黙。

女　「（*あたかもこの話から逃れようとしているように*）分かったわ。あなたは学校から帰って来た後、ここに自分の鞄を開けっ放しで放っておいたわね？私が帰って来てから閉めたのよ。まずこれを奥にしまってきなさい。」

次女　「ママは私の話を聞いてる？」

女　「聞いてるわよ。」

次女　「じゃあどうして何も答えないの？（*鞄を隅から持ち上げて、勢いよく奥に入っていく*）私はクリップや靴下の話をしていたわ、なのにママは鞄を中に置いてこいと言うのね。」

次女は出ていく。長女が椅子から立ち上がる。

長女　「こんなにいろいろ話すことなんかできなかったわ。半分も話す前に、手綱をぐっと引かれてそれでおしまい！」

女は少しの間思いに耽るようにぼーっとしている。

女　「（*意識して自分を取り繕って*）あなた何か言った？ 」

長女　「私が言ったのは…（*急に女の表情に気がついて*）ママは何か考えていたんじゃないの？」

女　「いいえ…考えてなかったわ（*あちこちを見て*）他に片付けるものがないかって見ていたのよ。そろそろ人が来るから…。」

長女　「誰が来るの？」

男 1 は牛乳のグラスに砂糖を入れて、かき混ぜながら奥の扉を通って来る。

男 1　「シンガーニヤーだよ。お母さんの上司。また新しい客が来始めたというわけさ。」

ダイニングテーブルにグラスを置き、誰も見ずに戻る。女は厳しい表情で男 1 が去るのを見る。長女は女のところに行く。

長女　「ママ！」

女の目が動き、長女の顔をぼーっと見つめる。彼女は何も言うことができない。

「どういうことよ！ママ！」

女　「別に何も…」

長女　「そんなわけないじゃない。」

女　「言ったじゃないの、何もないわ。」

そこから動いて棚のそばに行き、それを開くと、彼女は中から何かを探し始める。

長女　「（*彼女に続いて*）ママ！」

女は何も答えずに、棚から一枚のテーブルクロスを取り出し、棚を閉める。

「ママはこんな話を毎日聞くことに慣れてしまってる。いつまで言わせておくの？」

女は長女の言葉が終わるまで止まっていて、再び行ってテーブルクロスを交換し始める。

「（*彼女の方に来て*）ママはこの家のこと全てをする人よ。もしママができないなら…」

女の表情が変わったのを見て、長女は途中でやめる。女は古いテーブルクロスを手に持って、彼女を一瞥する。

そして湧き上がる心の昂りを止めようと顔をテーブルクロスで隠す。

「（*とても小さい声で*）ママ！」

女はゆっくりとスツールに腰を下ろしながら、顔からテーブルクロスを外す。

女　「(*泣いているような声で*) 私にはできないわ、ビンニー、もう無理よ。」

男１は部屋の奥の扉を通って来る。一枚の皿に二枚の焼けたトーストがのっている。女の言葉は彼の耳に届いたが、彼はわざと自分の顔に何の反応も示さない。皿を牛乳のグラスの近くに置いて、彼は本棚に向かい、その下の部分に保管されているファイルからまるで何か重要なファイルを探しているかのような格好をする。長女は話す前に一瞬の間を取った後、彼を見る。

長女　「(*特に男に聞かせるように、女に向かって*) ママが無理なら、この家で誰ができるというの、教えてよ。」

男１がファイルのほこりをはたくためであるかのように、数回強くファイルを叩く。

「物心がついた時からずっと見ていたわ。ママは全てに我慢して、この家のために日夜を問わず自分を殺し続けているわ、それなのに…」

男１が今、別のファイルをより力をこめて、念入りに叩く。

女　「それでどうなったって言うの？」

耐えられないような視線を男１に目を向けてスツールから立ち上がる。男１は両方のファイルを強く互いに打ち付ける。

「（*男１がファイルをバタバタさせているのに突然いら立って*)今あなたはこのほこりを家全体にまき散らさなきゃならないの？」

男１　「ジュネージャーのファイルを探していたんだ。もういいよ。」

なんとかしてファイルをその場所に戻そうと突っ込み始める。次女はバタバタと中からやって来る。

次女　「ちょっと、あいつがまた私のことをいじめるの！」

長女　「(*半ば叱るように*) どうしてそんなに叫ぶの？」

次女　「だって根暗が私のことを…」

長女　「根暗、根暗って何なのよ？あなたはアショーク兄さんって呼べないの？」

次女　「アショーク兄さん？…あれが？」

皮肉交じりに笑う。

女　「今、アショークは奥で何してるの？私、思っていたけどあの子は…。」

次女　「今まで寝てたわよ。私が行って起こしたら、私の髪を引っ張り始めたの。」

長男が中からやって来る。彼は髭を二、三日剃っていないようである。

長男　「誰が寝ていたって？ 俺？ 絶対嘘だ。」

長女　「剃るのをやめてしまったの？」

長男　「(*自分の顔に触れる*) フレンチカットしようかと思って。俺の顔に似合うかな？」

次女　「(*間髪入れずに*)誰も私の話を聞いてくれないわ！中で私の髪を引っ張って、外に出たらフレンチカットの話をしてる！嘘つき！」

ダイニングテーブルから牛乳のグラスを取って、ゴクゴクと飲む。男性 1 はその間、棚やファイルにかかりきりになっている。一つのファイルがどうにかして中に入ると、さらにファイルがいくつか外に出て、それらをどうにかして入れると、最初のファイルが後ろに落ちる。

女　「(*長男のところに来て*) 一つ聞いてもいいかしら？」

長男　「いいよ。」

女　「この子は何歳なの？」

長男　「それは俺が母さんに聞きたいことだよ、で、この子は１２歳だっけ…」

長女　「１３歳よ。」

女　「１３歳の女の子はどのくらい大きいの？」

長男　「１３歳の女の子は１３歳の大きさで、１３歳の大きさじゃないといけないけど、この子は…」

女　「あなたが彼女の髪を引っ張っていいような子供じゃないわ。」

次女は長男に向かって舌を出す。男１はファイルの一つを何とか片付けて立ち上がる。

長男　「それなら本当に俺は間違っているって認めなきゃいけない。」

女　「そうよ…」

長男　「俺はこいつの手から無理やりこの本を取り上げた。」

男１　「(*黙っていられずに、前に出て*) 何の本？」

次女　「嘘よ。私はこいつの本を一冊も取ってないわ！」

次女はトーストの皿を手に持って座る。

男１　「(長男の*ところに行って*) 何の本だい？」

長男　「(*シャツの中から本を出して見せる*)この本。」

次女　「嘘よ、嘘！こんな本見たこともないわ！」

長男　「(*目を剥いて次女の方を見て*) 見なかった？」

次女　「(*ひるんで、強情に*)あんたは枕の下に置いて寝てただけじゃない、あたしがちょっと見たからってそれが…」

男１　「(*手を伸ばして*) 見てもいいかい？」

長男　「(*本をシャツに戻して*) いや、父さんが見るものじゃないよ。(*女に向かって*) こいつが何歳か、まだ聞くつもり？」

長女　「どうしてアショーク…それはあの本でしょ、カサノヴァ[2]の…？」

---

[2] ジャコモ・カサノヴァ（Giacomo Casanova 1723-1798)。イタリアのヴェネツィア出身の文人。

男 1　「(*大きな声で*) 待て！（*順番に全員の顔を見て*）誰か教えてくれるか、俺が何歳かって。」

少しの間があく。その間、次女の頭と足だけが動いている。

女　「誰もそんな話していないわ…」

男 1　「(*一つ一つの単語に力を込めて*) 俺は何歳だと聞いているんだ。俺は何歳だ？」

女性　「（*これから起ころうとしている状況に身構えて*）それを聞いてどうするつもりなの？」

男 1　「そうだ、聞いて知りたいんだ、今日こそ。人生の重荷を背負ってから何年経ったのか？ 自分の家族の世話をしながら何年経ったのか？そして、結局、俺は今日どこにたどり着いたのか？たどり着いたところは、みんなが俺を馬鹿にして、どいつもこいつも俺に対してわけの分からない話をするだけじゃないか。俺に対して無礼なふるまいをする場所にたどり着いたというのか。」

長男　「(*弁明しようとして*) 僕は言ったのはつまり、父さん…」

男 1　「誰でも何か理由はあるんだ。こういうわけで言った、ああいうわけで言ったってな。俺が知りたいのは、俺のこの家において、いつ何時、どういう理由で俺は黙って聞いていなければならない身分になったのかということを知りたいんだ。いつでも侮辱され、揚げ足を取られて。これだけの長い年月をかけて、たったこれだけしか俺は得られなかったのか。」

女　「（*嫌そうに彼を見て*）あなたはこれら全てを誰に向かって話しているの？」

男 1　「誰かいるのか？俺の話をまともに聞こうとするやつは？聞かなきゃならんやつは？みんな俺のことをゴム印以外に何とも思っていないんだ。必要な時にゴム印を押して…。」

女　「あなたは大したことを言っていないわよね？」

長男　「（*彼女を止めようとして*）母さん…！」

女　「私はあの人にただこう聞くだけよ、ゴム印は何を意味しているのかと。権利、地位、名誉、そうでしょう？」

長男　「（*再び彼女を止めようとして*）聞いてよ、母さん…。」

女　「（*誰のことも気にせずに*）あなたのおかげでそんなもの、この家でいったい誰が手にしたというの？どういう意味で言っているのかしら…。」

男１　「どんな意味でもない。俺はこの家では一つのゴム印ですらない。ただのゴムのかけらだ。どんどんすり減っていく消しゴムのかけらだ。それで、誰か俺に理由を答えられるのか、俺がどうしてこの家にいなくてはいけないのか、その理由の一つでも。」

全員が黙っている。

「誰も答えられないだろ？」

女　「私は小さな質問を一つしていたのよ、あなたに…」

男１　「（*うなずいて*）そうだ、これは小さな問題なんだ。権利、地位、名誉、これらは全てこの家では外部の人から得られるものだ。この家について、今日までなしえたもの、もしくは将来なしうるもの、それは全て部外者によってしか作られない。俺を頼りにしていると、何もかもダメになる、これからもどんどん悪くなる。（*長男に向かって*）こいつはどうして何もせずにフラフラしているのか、俺のせいだ。（*長女に向かって*）お前はある夜何も言わずにどうして出ていったのか、俺のせいだ。（*女の前に来て*）それにお前も、お前もこんなに長い年月なぜ望み続けているんだ…」

女　「（*激怒して残った三人に向かって*）聞いているのあなたたち？」

男１　「俺自身の人生を台無しにする責任は俺にある。お前の人生を台無しにする責任も俺にある。お前たち全ての人生を台無しにする責任も俺にある。それでも俺がこの家にしがみついているのは、もともと怠け者で、出不精で、骨の髄まで錆び付いているからだ。」

女　「私は知らないわ、貴方は本当にそう感じているのか、それとも…」

男１　「そう思ってる、俺は虫けらだ。内側からこの家を食い荒らしている。（*玄関に向かって進む*）俺の腹は膨れた。この先もずっと腹

は膨れたままだ。（*扉のところで止まって*）この家に、他に食べるものや、ここに残る理由になる何かがあるのか？」

男 1 は玄関から出ていく。少しの間、全員が呆然としている。そして、次女が手に持っていたトーストを口に持っていく。

長女　「どう思う、ママ？」

女　「夜までに帰って来るわよ、毎週金曜と土曜には起きてることよ。」

次女　「（*食べ残ったトーストを皿に叩きつけて*）ペッペ。」

長女　「（*かなり腹を立てて*）いったいどうしたっていうの？」

次女　「なんでこんな目に遭わなきゃならないの。これはトーストなの？炭なの？」

女　「（*歯を食いしばって*）ちょっといらっしゃい。」

次女　「いやよ。」

長女　「来なさいって言ってるでしょう。」

次女　「行かないわ。（*急に立ち上がり外へ出ようとする*）部屋の中では髪の毛引っ張られて。部屋の外ではガミガミ、食べ物は炭も同然。今そっちへ行ったらママの平手打ちをもっとくらうだけなんだから。」

玄関から出ていく。

長男　「（*彼女の後ろについて行こうとして*）俺があの子を見て来るよ。少なくとも、あの子を俺が…」

玄関の近くまで着くや否や、後ろからの女の声が彼を引き止める。

女　「待ちなさい。」

長男　「（*なんとかして出ていこうとして*）まず行ってあいつを…」

女　「（*とても厳しい声で*）まずあなたはここに来て、私の話を聞きなさい。」

長男は何か必要な仕事に行くのを止められた様子で女のところに戻って来る。

長男　「何？」

女　「ともかくあなたは今どこにも行ってはいけないわ。あの人が今日また少ししたら来るから…」

長男　「（*「誰かが来るからと言って俺になんの関係があるんだ」と言った表情で*）誰が来るって？」

長女　「ママのボスよ、名前はなんだっけ？」

長男　「あぁ、あの人か…。」

長女　「あの人に会ったことあるの？」

長男　「二度ね。」

長女　「どこで？」

長男　「この家で。」

女　「（*長女に向かって*）二回ともこの子のために私は彼を呼んだのよ、今日もこの子のために…。」

長男　「（*少しきつく*）俺のために？俺があの男と何の関係があるっていうの？」

長女　「ママはあの人を通じて兄さんの仕事を斡旋してもらうために…。」

長男　「俺は仕事なんて必要ない。少なくともあの男を通じてなんて絶対に嫌だ。」

長女　「どうして？あの人がなんだっていうの？」

長男　「クズだよ、あの男。話し方も座り方も下品だ。」

女　「月給５０００ルピーなのよ。オフィス全部を見ているのよ。」

長男　「月給５０００ルピーで、オフィスの責任者。でも、自分のズボンのボタンは…。」

女　「アショーク！」

長男　「母さんの上司じゃなかったら、あの日俺は耳をつかんで家から追い出したよ。ソファーに大股開きで座って一人で何か思案している…どこか別の方を見ながら股間を掻き続けている、そして俺にこう言うんだ…（*真似して*）「分かった、聞かせてくれ、君は政治についてどう思うかね？」 何が政治的な考えだ！股間がかゆくて、かゆみ止めの絆創膏のことしか考えていないくせに！」

女　「（*自分の頭を抱えて、長女に向かって*）こういう人のために、私が一日中こき使われているのよ。」

長男　「最初５秒間は人の目を覗き込む。そして唇の右の端で少しニヤッとして一つ一つの単語を気取って話しながら聞くんだ。（*彼の声で*）「君は何を考えているんだ、最近の若者の間で無軌道が広がっているのはどうしてだ？」あの上司はわざとお堅いヒンディー語の単語を使うんだ、若者たちの間に！無軌道が！だとさ！」

女　「それで？」

長男　「それでって何が？」

女　「あなたはどうしたいの？」

長男　「何を？」

女　「自分を。」

長男　「俺のどこが問題なんだ？」

女　「生きていく上で、あなただって人生で何かしたり、何かを掴んだりしなきゃいけない、それともお父さんのように…？」

長男　「（*再びカッとなって*）どうして何かにつけて父さんにこじつけようとするの？」

女　「勉強だって途中でやめてしまった。エア・フリーズに就職させたのに、六週間で投げ出す。今、私はもう一度やり直してみようって…」

長男　「どうしてそんなことしようと思うのさ？俺は母さんに努力するように言った？」

長女　「じゃあ、あなたは一生何もしないつもりなの？」

長男　「そんなこと言ったっけ？」

長女　「じゃあ会社勤め以外にあなたに何か…。」

長男　「それは分からない。でもこれだけは言えるよ、自分が心から関心を持ってないものには…。」

女　「関心ってあなた…。」

長女　「やめて、ママ。」

女　「あなたが黙りなさい、私に話をさせて…（*長男に向かって*）あなたの関心って、たった三つでしょう、一日中ダラダラ寝て、写真を切り抜いて、家のいろんなものを何やかんや持ち出して…」

長男　「（*厳しい視線で彼女を見て*）これがまともな家なのか？」

女　「じゃあここをなんだと思ってるのよ？」

長男　「俺は…」

長女　「（*彼を話させないように*）ねぇ、アショーク、ママは全部こういう意味で言ってるのよ…。」

長男　「俺が意味を知らないと？お前はここから出ていっただろ、でも今でも俺はここに住んでるんだ。」

女　「（*がっかりした表情で*）じゃああなたはどうしてこの家から…」

長女　「（*叱りつけるような声で*）なんてこと言うの、ママ！」

女　「なんてこと言うのですって？この家の人は私のことを何だと思っているの？みんなのために毎日料理をする機械とか？もし少しでも誰かが考えてくれたら、どんなに私が…」

ちょうどこの時、玄関に男２の姿が見え、扉が軽くノックされる。女は驚いてそちらを見て、そして自分の言いかけた言葉を途中でやめる。

「（*声をどうにかして取り繕って*）あら！あなたなの？いらっしゃい、中へどうぞ。」

長女　「（*しっかりした様子で玄関の方へ進んで*）いらっしゃい。」

男２は、慣れている様子で彼女の丁寧な挨拶に応えて、中へ入る。

女　「この娘が長女のビンニーです。アショークはもうお会いしましたわね。」

男２　「やあやあ、この娘があのお嬢さんか。君がこの娘の話をしていたな。去年手術したんだったな…いやいや、あれはミセス・マートゥルの子だったか？いや違うな…誰かの娘だったはずだ。」

女　「こちらへどうぞ、ソファーへ。」

ソファーの方へ進んで、男２は長男と目が合う。長男はぶっきらぼうに手を合わせて挨拶する。男２は再び慣れた様子で応える。

男２　「（*座りながら*）たくさんの人と会わなきゃいけなくて…（*自分の時計を見て*）７時５分前だ。７時までに来るようにと頼まれていてね。何人かと特別に会うために呼ばれているんだ。（*長女をじろじろと見ながら、女に*）君はこの娘について話していたな。どのカレッジ[3]に行っているんだ？」

女　「いいえ、カレッジには…」

男２　「そうかそうか…そう言っていたな。（*長女に向かって*）お座りなさい。（*女に向かって*）君も座ったら？」

女はソファーの近くの椅子に座る。長女は少しためらって立ったままでいる。

女　「座りなさい、どうして立っているの？」

長女　「この方は急いで帰られるんでしょう…お茶でもと思って…」

男２　「いやいや、お茶も何もいらないよ、そもそもあまり飲まないんだ。どこかに記事があったんだ…リーダース・ダイジェストだったかな、たくさんお茶を飲むと（*股間をかきながら*）リーダース・ダイジェストがあんな記事を出すなんて！ここでは、こんな話、あんな話…、きちんとした雑誌なんてまったく見つからない。数日前、アメリカ人が一人来て…それでこう言っていた…」

長男は、その時まで離れた場所に立っていたが、今、歩いて彼のそばへ来る。

長男　「（*女に*）ほらね、母さん…」

女　「今はやめなさい。（*男２に*）一杯だけでもどうです？」

男２　「いや、本当にいいんだ。会社では世界中と取引があってね、世界中の国から人が会いに来るんだ。この前、日本から代表団がやっ

---

[3] 総合大学に所属する学校のこと。

て来たんだ。なんといっても…日本は最近全てを牛耳っているんだ。ちょうどその日、私は日本の前年の経済指標を見ていたんだ…」

長男　「ちょっと僕はこれで失礼します…」

女　「言ったでしょう、少し待ちなさいって…（*男２に*）コーヒーがお好きでしたら…」

男２　「お茶もコーヒーも結構だ。そうだ、コーヒーといえば一つ話があるんだ。最近のことではない、何年も前のことだ。私が大学の文学大会の世話人をしていた時のことだ。（*心の中でそのことを楽しく思い出しながら*）そうだそうだ…。文学の動向には最初から興味があった…。そうだ…（*長女と長男に向かって*）君たち座りなさい。」

長女が座る。

長男　「いや僕は…」

女　「（*立ち上がりながら*）座りなさい！私は少しスナック菓子を持って来るわ。」

長男を座るように小突き、奥の扉から出ていく。長男は不満げな表情で女を見る。そして歩いて、書き物机の近くへ行く。長女に目を合わせて顔をしかめ、椅子をソファーの方に向けて座る。

男２　「（*長女に向かって*）以前君とどこかで会った気が…会ったよね？」

長女　「私と…あなたが？」

男２　「どこかの面接に？」

長女　「いいえ」

男２　「でも会ったと思うんだ。他の誰かかな…。本当に君にそっくりだった。これは不思議なことじゃないだろう？」

長女　「何がですか？」

男２　「多くの人がお互いに似ていることさ。私のおじさんもそうだ。後ろから見たら、モーラールジー・デーサーイー[4]にそっくりだ。」

この間、長男は机の引き出しを開けて写真を取り出し、それらを机の上に広げ始める。

長男　「僕のおばさんもそうです。首をちょん切ってみるとジーナ・ロロブリージダ[5]に見える。」

男２　「そうそう、何人もそういう人がいるんだ。人生の摩訶不思議な出来事に注意を向けるならば、何度もこう感じるんだ…（*急にポケットを探って*）家に忘れたのか？（*ポケットからメガネを取り出して戻す*）いや、あった。で、私が話していたのは…なんだったかな？」

長女　「人生の摩訶不思議な出来事に注意を向けると、という話を…」

長男　「日本の産業の…あれはなんだっけ？その話をしてたんじゃ？」

女がその間にスナック菓子の皿を持って台所からやって来る。

女　「何かの出来事について話していたのでは…コーヒーを飲むことについて…」

男２　「ああそうか…それなら…それは…」

女　「少しどうぞ。」

男２　「どうも、もちろんいただくよ。（*長女に向かって*）君も食べなさい。（*女に向かって*）ほらもう座りなさい。」

女　「（スツール*に座って*）あのことについて少し考えて下さいましたか？」

---

[4] モーラールジー・デーサーイー（मोरारजी देसाई 1896-1995）。インドの政治家、元インド首相。

[5] ジーナ・ロロブリージダ(Gina Lollobrigida　1927-2023)。イタリアの女優。

男２　「（*食べながら*）何について？」

女　「私があなたに話したことです…あなたから見てどこか良い場所があれば…」

男２　「うまいな、これ…。」

女　「覚えていますよね？」

男２　「覚えているとも。君が一度言っていたな。自分の誰かいとこについて話していた…いや違う、それはマルホートラー夫人が言っていたのか。君は誰について話していたかね？」

女　「（*長男の方をみて*）この子についてです。」

男２は向きを変えて、長男の方を見る。すると長男はわざとらしい微笑みを浮かべる。

男２　「そうかそうか…どこまで勉強したのかね？商学部卒？」

女　「既にお伝えしました通り、理学部で勉強していたんです…三年目で病気になって、それで…」

男２　「なるほどなるほど…そう言っていたな。それでエアインディアでしばらくの間…。」

女　「エア・フリーズです。」

男２　「おお、エア・フリーズか。なるほど…そうかそうか…」

再び向きを変えて長男の方を見る。長男はまたにっこり笑う。

「君もここにどうぞ。なぜそんなに遠くに座っているんだい？」

長男　「（*自分の鼻の方に指を向けて*）ええ、僕はちょっと…」

男２　「そうかそうか…国の気候は、どうしたものか。気候の点でいうと、私が一番好きな国は、イタリアなんだ。去年、たくさん旅行をしなければならなかった。ヨーロッパ中を回ったが、イタリアで得られたものが、他の国では得られなかった。イタリアの一番大きな特徴は何か知っているかね？…とても美味いな。どこで買ったんだい？（*時計を見て*）もう７時５分になってしまったな。じゃあ…」

女　「ここの角のお店で買いました。」

男２　「良い店だな。私はよくこう言うんだ…衣食の二つの観点では…あのアメリカ人もこう言っていたな…この国の食べ物や飲み物、着るものは、非常に多様性があって…それというのも、全ての外国人がこのことを認めている、ロシア人だろうがドイツ人だろうが…。世界で冷戦をおさめるために、我が国の実質的な貢献が確かにあったと言っている。君、自分のサリーを見てごらん、まあつまらんものだが…それでも、このストライキのせいで何も進まないから、私たちの繊維産業は未だに…そうだ、君はあの通知を見たかね、労働組合が経営陣に突きつけたというあの通知を？」

女は「はい」というようにうなずく。

「あれはとんでもない見当違いの話だよ。私たちの口座は初めからこんなに…」

長男は引き出しから一枚の便箋を取り出し、引き出しを閉める。男２はまた向きを変えて、彼の方を見る。長男は再びニタッと笑う。男２が顔の向きを変えるや否や、長男は便箋に鉛筆で線を引き始める。

「で、私が話していたのは…なんだったかな？」

女　「それは…」

長女　「いろんなことについて話していましたよ。」

男２　「でも、私は何から話し始めたかな？」

長男　「イタリアの一番大きな特徴の話から。」

男２　「分かった、その後は…？」

長男　「衣食の多様性…アメリカ、ドイツ、ロシア…冷戦、ストライキ…繊維産業…そして口座。」

男２　「この子の記憶力は素晴らしいな。で言いたかったことは…」

女　「もう少しどうぞ。」

男２　「いや、もう結構。」

女　「もう少し…ところで、何はともあれこの子のためにあなたが何かして下さるんですよね？」

男２　「もちろんだよ。誰のために何をしたらいいかね？」

女　「（*長男の方を見て*）あの子のために…何か…。」

男２　「そうかそうか…もちろんだ。任せなさい。（*長男の方を向いて*）理学部では、どれくらいの成績だったのかね？」

長男は指で空気中にゼロ、と書く。

「どんな？」

長男　「（*三、四回指を回して*）これ！」

男２　「（*意味が分かったように*）ああ！」

女　「三年目で病気になったので…それで…。」

男２　「そうかそうか…なるほど。分かった。探しておくよ。（*時計を見て*）もう行かなくては。とても時間が経ってしまった。（*立ち上がって*）またいつか家に来なさい。ずっと来ていないだろう。」

女と長女は一緒に立ち上がる。

女　「私もそう思っていました。かわいいあの子に会いに。」

男２　「あの子も君がどうして最近来ないのか聞いていたよ。自分のおばさんたちがとても大好きなんだ。母親がいないからあの子は…」

女　「とても愛らしい子です。いつお伺いすればいいかまた聞きます。この子にも一度あなたに会うように言っておきます。」

男２　「（*長女の方を見て*）誰に？この娘に？」

女　「アショークに。」

男２　「そうかそうか、もちろんだ。でも君も来なさい。話は君にしますからね。」

女　「お帰りになるのよ、アショーク！」

長男　「（*まるで最初は意味が分からなかったかのように*）お帰りになるんですか？」

立って近くへ行く。

男２　「（*時計を見て*）こんなに遅くまでいるとは思っていなかった。（*玄関に向かいながら、長女に*）君は仕事をしているのか？」

長女　「してません。」

女　「したいと思ってはいるんですけど…（*長女に*）働きたいんでしょう？」

長女　「うん…いや…でも…」

女　「怖がってるんです。」

男２　「怖い？」

女　「自分の夫が。」

男２　「夫が？」

女　「そうです…彼は嫌いなんです。」

男２　「この娘を？」

女　「いいえ、娘が働くことが。」

男２　「そうかそうか…なるほど。」

女　「ですから、あなたは考えてくださいますよね、この子のために…？」

男２　「この娘の？」

女　「私が言いたいのはあの子ですよ…」

男２　「ああ、そうかそうだったな、そうだそうだ…君は家に来なさいね。オフィスの話をしよう。労働組合のことで…。」

女　「お伺いします。この子も行くとしたら…」

男２　「（*時計を見て*）遅くなってしまった。（*長男に*）よし、一つ教えてくれ、どこもかしこもストライキだらけだ、それについて君はどう思うかね？」

長男は、まるでズボンの中に何か虫が入ったかのように飛び上がる。

長男　「くそ、なんだ、こいつ！」

まるでズボンの外側から虫を捕まえようとしているかのように飛び上がる。

長女　「どうしたの？」

女　「（*少しいらだって*）お客様が聞かれたでしょう？」

長男　「（*長女に向かって*）なんでもない…虫がね、一匹。」

長女　「虫？」

男２　「この国では…」

長男　「捕まえた。」

男２　「虫ときては数えられないほどいる。」
長男　「潰してやった。」
男２　「潰した？くわばら、くわばら！無残なことを…」
女　「この子はそうなんですよ、虫をつかまえたらすぐ殺してしまうんですよ。」
長男　「虫は残酷なことをいくらしてもいいのか？」
男２　「価値観の問題だ。私はいつもこう言うんだ…見送りは結構、お構いなく。」
女　「道路までご一緒します。」
男２　「この国では倫理的な規範を高めるために…、君は講演を聞いたかな？…最近来られたという彼の名前はなんだったかな？」
長男　「ニロード大僧正？」
男２　「そうそう…そんな名前だったな、とても良い講演をしている…もっともホロスコープも…しかし講話ときては、いやはやすばらしい！」

最後の言葉と共に敷居をまたいで外へ出る。女も一緒に外へ出ていく。

長男　「ははっ！」
長女　「何を笑っているの？」
長男　「演技を見たか？」
長女　「誰の？」
長男　「俺の。」
長女　「じゃあ兄さんは…」
長男　「馬鹿にしてやったのさ、あいつを。」
長女　「実のところ、誰が誰を馬鹿にしていたのか分からないわ。」
長男　「どうして？」
長女　「あの人はそれでも５０００ルピーの給料をもらっているのに。」
長男　「５０００ルピーをもらう人間の顔を見たのか？」

便箋に書いた絵を彼女に見せる。

長女　「これがあの人の顔なの？」

長男　「そうだ」

長女　「頭の上のこれは何？」

長男　「動物の角を付けて、消したよ。よく言うだろ、角がないって。」

長女は便箋を彼の手から取って見る。女が戻って来る。

女　　「あんた、少し外に来なさい。」

長男　「どうして？」

女　　「車が動かなくなったの。」

長男　「なんで？」

女　　「バッテリーが上がったのよ。車を押さなきゃ。」

長男　「今から？まだ就職の話もしてないっていうのに…」

女　　「早く行きなさい…ただでさえ遅くなってるのに。」

長男　「もし本当に彼が仕事をくれるって言うなら、いったい何をさせられるか…」

玄関から出ていく。

女　　「あの子はいったいどうなるのかしら…あなたが手に持ってるのは何なの？」

長女　「手？これはあれよ…兄さんが描いてたやつよ。」

女　　「描いてたですって？見せなさい。」

長女　「（*便箋を彼女の方に渡しながら*）こんなの…何を描いてたかは分からないわ…ただ座りながらこうやって…」

女は少しの間それを見つめる。

女　　「この顔は何となくあの人みたいじゃない？」

長女　「誰のこと？」

女　　「あんたたちのお父さんよ。」

長女　「パパ？まさか。」

女　　「ちょっとそんな感じがするのよ。」

長女　「兄さんはあの人の似顔絵を描いていたわ、今帰ったあの人の。」

女　　「（*眉をしかめて*）こんなことをしていたの？」

長男が戻って来る。

長男　「（*まるで手で埃を払うように*）あの見た目にあの車、どっちもひどいもんだ！」

女　「こっちにきなさい。」

長男　「（*近くに来て*）車のエンジンは押したらまた動いたよ。（*自分の額を指さして*）でもここのエンジンの方が問題じゃないか…。」

女　「（*少し厳しい声で*）これはあなたが描いたの？」

長男　「どう思う？」

女　「あなたは何を描いたの？」

長男　「最初の類人猿だ。」

女　「なんですって？」

長男　「類人猿。」

女　「ふざけないで。ちゃんと答えなさい。」

長男　「そう見えない？このチラチラする舌、雨漏りする洞穴のような目…。」

女　「私はあなたの態度が本当に嫌だわ…聞いているの？」

長男は返事をせずに書き物机の方に進み、そして机から写真を取って見始める。

「聞いてるの？」

長男　「聞いてるよ。」

女　「聞いてるなら、何か言うことがあるんじゃないの？」

長男は同じように写真を見続ける。

「言うことないの？」

長男　「（*写真を机の上に戻しながら*）何が言えるって言うの？」

女　「言えないなら、言わなくても良いわ。でも、私が必死に頼んで人を招待したら、来るなりその人たちをバカにする、その人の風刺画を描く、そんなこと、私は耐えられないわ。分かった？本当に、絶対に耐えられない。」

長男　「耐えられないなら、どうしてあんな人たちを家に呼ぶのさ、あの人たちが来て…」

女　「ええ、ええ、言いなさい、家に来てなんだと言うの？」

長男　「この話はもうやめてくれ。これだから俺は最初から出ていきたかったんだ。」

女　「ちゃんと最後まで言いなさい。」

長男　「あの連中が来るせいで、俺たちはよけい惨めな存在になるんだ、自分にとって。」

女　「（*少し呆然として*）どういう意味？」

長男　「言った通りの意味さ。今日まで、母さんが呼んだ人たち、なんで呼んだんだ？」

女　「あなたはどう思うの？どうして私が呼んだのか。」

長男　「その人の何かしら「偉大」なところが理由なんだ。一人目はとても知性がある。二人目は５０００ルピーの給料。三人目は委員会の主任。呼ぶ時ははいつだって人としてじゃなくて、彼らの給料、名誉、地位を呼んでいたんだ。」

女　「何が言いたいの？そういう人たちが来たら、この家の人が惨めになるっていうの？」

長男　「すごく小さい存在になってる。」

女　「私があの人たちを呼んだのは…。」

長男　「どうして呼んだか分からないけど、そういう人ばかり呼んでる。じゃあ教えてよ、母さんはどうして呼んだの？」

女　「この家を何とかしようとしているのよ。私一人の上に、ものすごい重荷がかかっていて、それを誰かが私と一緒に運んでくれるんじゃないかって思ってね。もし、私が何か特別な人たちと関係を結んでおきたいと思うなら、それは自分のためではなく、あなたたちのためなのよ。でも、あなたたちがそのせいで卑屈になるなら、私は努力するのをやめるわ。そうよ、私は一人でこの家の責任を背負っていられないし、この家のお金をみんな使って、何年も無駄に過ごしている人がいる。他の人たちは、自分で努力して何かするどころか、私が苦心してまともな職が手に入ることさえ自分にとっての侮辱だと思ってる。もう耐えられないわ。ここで他の誰も痛みを感じていないのに、どうして私は一人で自分自身

を傷つけているの？私も何もしないで楽に座っていてどこが悪いの？そうしたらあなたたちも惨めな思いをしなくてすむんでしょう。」

長男は黙って机の引き出しを開けたり閉めたりしている。

女　「どうして黙っているの？言いなさいよ、ご立派な人生を過ごす方法を考えていたんでしょう？」

長男　「もうやめてよ、母さん。俺は自分の口から何も言いたくないんだ、俺の言ったことで母さんが…」

女　「私がどうしたっていうの？言いなさい、言いかけたことを。」

長男　「(*椅子に座って*)なんでもないよ。」

投げやりな調子で雑誌とハサミを引き出しから取り出し、力強く閉める。

女　「何も言うことがないなら、椅子に座って写真を切り抜いていたら？」

長女　「(*近くに来て、彼女の腕を掴んで*)やめて、ママ！私が兄さんと話をするわ。(*長男に向かって*)ねえアショーク…」

長男　「お前が今話す必要あるか？」

長女　「私はあなたにただこれを聞きたいだけなのよ…」

長男　「でもどうして聞きたいんだ？俺は今誰にも何も答えたくない。」

長女　「(*少し口をつぐむ*)あなたも分かってるでしょ、ママは今日まで…」

長男　「まだ言うか？」

女　「どうしてこんな子に話をするの？誰かと話をする必要なんて少しもないわ。自分で何かの結論を出さなきゃならない、その時が今来たのよ…!」

長男　「絶対そうすべきだ。」

長女　「アショークったら！」

長男　「俺は言いたくなかったけど、でも…」

女　「じゃあやめたら？」

長男　「言わなきゃなんないだろ、もうやっていけないというのなら、どうして我慢するんだ、これ以上。」

女　「私がこの家を支え続けるしかないの、なぜって…」

長男　「他に誰も支えられる人はいないって話は何度もしただろ。」

長女　「じゃあ、兄さんは、ママがすることは何もかも…？」

長男　「俺が聞いてやるよ、母さんはどうして、誰のためにしているのか？って。」

長女　「私のためにしていたの…」

長男　「お前は家を捨てて出ていったじゃないか…」

長女　「キンニーのために…」

長男　「あいつは毎日ますますひどくなってるじゃないか。」

長女　「パパのために…」

長男　「父さんの様子を見て、かわいそうだと思わないのか？」

長女　「そして何と言っても、兄さんのためでしょう。」

長男　「俺は多分この家で一番役立たずだ。だけど、なんで俺がこうなったと思ってるんだ？」

長女　「それは…それは私どう答えればいいの？」

長男　「少なくとも自分のことは答えられるだろ。お前はこの家を捨ててどうして出ていったんだ？」

長女　「（*呆然として*）私が出ていったのは…出ていったのは…だって…」

長男　「お前がマノージュに恋していたから！こんないいかげんな説明、恥ずかしいと思わないのか？」

長女　「（*泣き出しそうになって*）じゃあ兄さんは私を責めてるの？」

ガクッとしてスツールに座る。

長男　「お前に言っただろ…話をするなって。」

女は静かに少し足を運んで進み、長男の近くへ行く。

女　「（*とても厳しく*）あんたは自分の言ったことの意味が分かってるんでしょうね？」

長男は何も言わずに雑誌を開いてその中から一枚の写真を切り始める。

「分かってるんでしょうね？」

長男は同じように黙って写真を切り続けている。

「ならいいわ。今日から私はただ自分の人生だけを考えていくわ。あんたたちはそれぞれの人生を自分で生きなさい。」

長女は片方の手でもう一方の手の爪をいじり始める。

「私には、生きる時間はもうあまりない。でも残ってる人生を、私はこんな風に我慢したくないの。私が何かすることでこの家が成り立っていたけど、もうおしまい。私の方から終わりにするわ、おしまいって決めたわ！」

見捨てられた魂を表象するような弱い音楽。長男は自分の切った写真を手に持って眺めている。そして再びハサミでチョキチョキとそれを大きなカケラに切り始め、それらが床の敷物に散らばる。照明が人を照らした後、小さくなって部屋の四隅の角に消えていく。舞台が暗転すると共に音楽も止む。しかし、ハサミのチョキチョキという音はそれでもしばらく聞こえ続ける。

〔場面転換〕